

# 仏領西アフリカ連邦と「アフリカ」概念の再解釈

中尾 沙季子

## 序論

人類学者バランディエはサハラ以南のアフリカ社会の研究に際して、「植民地状況」の特殊性と、その社会への包括的な影響を指摘した<sup>1</sup>が、社会の動きを包括的に規定する特殊な「状況」は、脱植民地化の過程にも存在していると考えられる。一方、脱植民地化は動的にしか存在しえない現象であり、植民地状況を脱しようという動きそのものをひとつの状況として捉えたとしても、そこから植民地以後の社会全体を方向づける独立変数を導き出すことはできない。しかし、それは植民地状況を前提とし、そのなかで展開していくものである一方で、その状況を超克し新しい状況をつくり出す潮流を孕んでもいる。そこで本稿で着目したいのは、そのダイナミクスに従って当時の状況がどのように解釈されたかという点である。新しい状況への移行の糸口は、各アクターが自らの依存している「状況」を解釈することを通して見出されていった。脱植民地化は「植民地状況」を支えてきた帝国システム内の関係性を定義しなおす複数の解釈のなかで進行していったのである。

旧仏領アフリカにおいて脱植民地化の動きが具体的な運動として体系化していくのは、帝国という政治体制そのものが疑問視されはじめる戦後、とりわけ 1950 年代のことである。脱植民地化の歴史はこれまで、フランス帝国の戦後の変遷、あるいは植民地諸国の独立闘争の歴史として多数描かれてきた。しかしこうした歴史はフォヴェルら<sup>2</sup>やジューシウィツキーら<sup>3</sup>の指摘するように、ヨーロッパ中心主義とアフリカ中心主義との狭間で難航し続けているといえる。脱植民地化の歴史は、まさにヨーロッパとアフリカの関係性のなかで異なった表象を付与され続けてきたのだ。一方それは、それまで「歴史に属さない」として帝国史の背景に置かれてきた「アフリカ」を歴史のなかに位置づけ、その歩みを表象しなおす作業でもあった。

「アフリカ」が一定の表象が付随するひとつの概念であることは、既にムディンベらによって論じられてきた<sup>4</sup>。植民地状況のなかで成立したこの概念は、帝国内部の関係性を内包するかたちで定義されていく。それは支配者からは他者性の象徴として、被植民者からはアイデンティティの拠り所として構想され、その表象は植民地化から脱植民地化にいたるまで、時代状況

を反映して変容を重ねていった。脱植民地化の舞台となった戦後という時代状況を、宗主国フランス、植民地アフリカ、双方の解釈を通して捉えようという本稿の試みは、すなわち、そのなかで「アフリカ」という表象がどのように位置づけられていたのかを明らかにするものでもある。支配の対象として名指されることで表象が形成されていった「アフリカ」が、次第に独立闘争を牽引する標語のなかに転用されていくさまは、「アフリカ」概念そのものが「植民地状況」を脱し、いわば脱植民地化されていく過程として捉えることができよう。脱植民地化は、政治体制の変革、それに伴う社会変化といった明示的な側面に留まらず、思想的な転換、とりわけ意味論的変容によっても進行する。「アフリカ」をめぐる表象の変容は人びとの意識にはたらきかけ、脱植民地化の流れを牽引していったのである。

「アフリカ」の脱植民地化は、それが帝国の枠組みを逸脱した新たな表象の範疇へと収斂していく過程として捉えることができる。帝国の枠組みにしがみつクフランスとそこから逸脱しようとする「アフリカ」、両者のかけひきの舞台となった戦後世界において、フランス帝国はこの状況をどのように捉え、「アフリカ」の表象はそれをどのように反映していったのか、またどのように同じ状況が捉えなおされ、読み替えられていったのだろうか。「アフリカ」の脱植民地化をもたらした状況とはどのようなものであったのか、独立前夜の仏領西アフリカ連邦を例にそのダイナミクスに迫りたい。

## 1. 戦後の社会状況

ホブズボウムは第一次世界大戦までを「帝国の時代<sup>5</sup>」と定義したが、フランス帝国の建設は帝国がほころびをみせはじめる戦間期になってから新たに進展していった節がある。しかも帝国という支配体制そのものが疑問視されるようになる戦後になって、フランスの帝国主義は逆説的にも絶頂を迎えるのである<sup>6</sup>。2つの世界大戦はヨーロッパ文明の絶対性神話を崩壊させる大きな契機となったが、それは被植民者たちが帝国の矛盾を指摘する端緒となる一方で、その矛盾を解消しようとするベクトルは、帝国の枠組みを強化する方向へと引き込まれていったのだ。

失われつつある威信を取り戻そうとする帝国主義的意識は、戦後のパワー・バランスの再定義にも大きく介入していくこととなる。帝国の存続をめぐって求心的、遠心的、双方のベクトルが拮抗するなか、その境界線上に姿を投影される「アフリカ」との新たな関係性は戦後の社

会、とりわけ冷戦の進行という状況のなかで築かれようとしていた。

### 1.1. フランス帝国主義の残存

フランスの戦後の方針は、1944年ブラザヴィル会議の時点で既に萌芽を見せはじめていた。アフリカ国家独立への第一歩として語られることの多いブラザヴィル会議であるが、ナチス・ドイツに占領されたヴィシー政権下のフランスに代わる、自由フランスの首都で開かれたこの会議に「アフリカ」側の参加者はいない。むしろ戦争協力の報酬としてここで掲げられた戦後の改革は、植民地を唯一不可分な共和国の一部として改めて掌握しようとするものであった。そこには、かつて共和主義の掲げる人権が、奴隷解放という大義のもとに植民地に介入したのと同様の構造をみてとることができよう。共和国と帝国は表裏をなしているにも拘わらず、外部から帝国へ介入するかたちを取ることで、その二面性そのものには無意識的であることができたのだ。帝国内部へと同化された「アフリカ」を通して、支配者は自らの姿を見ていたのであり、そこに「アフリカ」の存在は決定的に欠如しているのである。

権力基盤としての「アフリカ」の掌握が会議の中心的動機であったことは、当時の議事録から明白にうかがえる。レジスタンス闘争を率いるド・ゴールは、戦後へと続く覇権争いに先手を打つべく、植民地の総督、行政官たちを拠点とするブラザヴィルに集めるのである。会議で採択された決議の冒頭は以下のようにつづられている。

フランスが植民地において遂行する文明化の活動の目的に鑑みれば、自治につながるようないかなる発想も、また帝国がなすフランスの勢力圏の外での発展のいかなる可能性も忌避されるものである。たとえ遠地であっても植民地における自治政府設立の議論は除外しなくてはならない。<sup>7</sup>

この決議には当時アメリカを中心に再燃していた民族自決権の議論を抑止し、植民地をフランスの傘下にとどめたいという、帝国権力に対するフランス当局の執着が如実にあらわれているといえよう。会議は当時植民地省の記録に「フランス・アフリカ会議」(Conférence africaine française)と記されているが、この名称における形容詞の序列は、会議が「フランス」による、「アフリカ」に関する会議であったことを意味している。「アフリカ」は、あくまで政治的対象

物なのである。そして参加者たちはこの「フランス」が完全には帝国規模になりえなかったこと、すなわちインドシナ地域への日本勢力の進出によって当該地域の行政官たちが会議参加を断念せざるを得なかったことに遺憾の意を示すのだ<sup>8</sup>。

会議中に使用された語彙のなかにも、会議を帝国主義政策の一環として位置づけるに十分な表現を随所に指摘できる。植民地問題を担当し、会議の発起人となったルネ・プレヴァンが「文明化活動」あるいは「アフリカにおけるフランスの使命」、「責任」を説くと、臨時諮問議会議長フェリックス・グアンは「われわれの植民地に対する義務」に言及し、さらにド・ゴールはフランスを「覇権帝国」と表現している。また、三人ともが所有代名詞を用い、「われわれの植民地」「われわれのアフリカ」について語っているのである<sup>9</sup>。ここにはっきりと客体としての「アフリカ」の姿を見ることができよう。

帝国の変革が議論されたブラザヴィル会議の決議に基づいて1946年、第四共和政新憲法と共に成立したフランス連合は、結局帝国の根幹を継承したものとなった。帝国が解体へと向かう時代の要請にしたがって、以後「植民地」の語は置換されていくこととなるものの、その移行はなかなか徹底されない。これに対して最初に問題を取り上げたのは外務省であった。1949年8月17日付けで外務大臣は海外領土大臣に宛てて次のような手紙を出している。

フランス共和国の官報に掲載される海外領土に関する記事のなかに、しばしば「植民地」という語が用いられています。(中略)おそらく本土に暮らすフランス人にとって、そしてもしかするとフランス連合内のそれ以外の人々にとっても、この語の使用はたいていの場合、行政的な言い回しの持続性を示す数多くの例のひとつにすぎないでしょう。しかし、外国ではこの使用の継続は有害なものとして捉えられかねません。とりわけ、われわれが管轄している領土に対するわが国の政策が曲解されているところではそうです。<sup>10</sup>

これを受けて植民地省は9月2日の通達7653号で「国際的観点での不都合」を回避するために、この用語を他の表現で置き換えるよう改めて指示するのであるが、いずれにせよ、問題とされているのは国際社会との関係であり、反植民地的発想から植民地の変革がなされたわけではないことがわかる。むしろ、国際社会における自国の位置づけを考慮する発想の背後には、覇権を維持しようという帝国意識がはっきりと脈打っているのである。

さらにいえば、「行政的な言い回し」によって被植民者たちは名づけられ、分類されて服従を強いられていったのであり、それが存続しているということは、当然その表現の使用空間のなかでは帝国意識が共有され続けていることを意味している。フランス帝国の植民地であれ、フランス連合の海外領土であれ、「アフリカ」が行政的に「われわれ [フランス] が管轄している領土」であることに変わらないのだ。

このようにフランスにおける戦後の変化は、帝国主義というフィルターを通して進行していくこととなる。言い換えれば、フランスの立場は戦後になっても一定の連続性のうねにあった。よって、フランスにとって、戦争がもたらした帝国の動揺は帝国「内」の動揺であり、戦後の変化を既存のシステムのなかでいかに消化していくかが模索されたのだ。戦後の社会状況を反映した「アフリカ」の新しい動きを、フランスは帝国支配の文脈で読み込もうとするのである。

## 1.2. 冷戦と帝国主義

一方、第二次世界大戦中から終戦直後にかけては、共産主義勢力が反帝国主義的言説を通して植民地内部に浸透していった時期でもあった。なかでもフランス共産主義は、レジスタンス運動との提携という背景も手伝って、自由フランスの拠点となっていた仏領アフリカで重要な位置を占めていたといえる。仏領アフリカの各地では「共産主義研究会」が自由フランス支持のために結成され、宣伝活動と幹部養成を行っていた<sup>11</sup>。次第に「アフリカ人」会員が増えてきたころになって、後続機関として、植民地同士が連携した連邦レベルの政党を結成しようという動きが起きてくる。こうしてフランス共産党の傘下のもとアフリカ民主連合（RDA）が発足するのは1946年のバマコ会議のことであった。

ところがこの会議を警戒したフランス社会党（SFIO）はセネガルの黨員たちの会議への出席を禁ずる方針を発表する<sup>12</sup>。このできごとは、セネガルにおけるフランスの影響力の強さをよく表わしている。大西洋に面したその立地のために、サハラ以南のアフリカにおいて最初のフランス領となったセネガルは、いわば橋頭堡のような存在として試験的にさまざまな同化政策の対象となり、共和国教育を受けて「進歩」したエリートたちを輩出していた。フランスの国会にはじめて議席を獲得した黒人議員がセネガル人だったのも偶然ではない。議会への進出が早かったセネガル・エリートたちの政治参加は、フランス政治の場において、フランスの政党への加盟を通して行われたのである。なかでも最初の世代が進出しはじめる戦間期に議会で勢

力を強めていたSFIOがセネガルでも多くの加盟者を集めており、SFIOセネガル支部は、仏領アフリカにおける政治活動を担う最初の支流となっていた<sup>13</sup>。また、文明化という大義のもとでの人道的介入という観点から、同化政策が当時のSFIO内部で市民権を得ていたことも想起しておく必要がある<sup>14</sup>。党の内部に現地エリートを養成する方針もその政策の一環であった<sup>15</sup>。

1946年第四共和政とフランス連合の成立により、国会における海外の領土を代表する議席が増えることとなるが、新たに2議席となったセネガルの枠に当選したのは、SFIOセネガル支部の党员たちであった。SFIOセネガルの代表を務めるラミン・ゲイと、ゲイが政界に導入し後に独立セネガル初代大統領となるレオポルド・セダール・サンゴールである。しかし、当時共産主義研究会で活動していたシュレ・カナルの記録によれば、この選挙においてもフランスは介入を辞さなかった。「サン・ルイの選挙事務所がRDAの候補者の登録を拒否するので、バマコ会議から戻ったレイモン・バルベ氏が政府に働きかけなくてはならなかった<sup>16</sup>」というのだ。RDAへの弾圧について同氏は次のようにも記している。

RDAは、当時ダカールに唯一の印刷所（ボルドーのデルマス・グループが経営するアフリカ大印刷所）での機関誌『ブラック・アフリカ』の発刊を許可されておらず、1946年10月に唯一の号がフランスで印刷された。印刷所の使用禁止事由（稼動状況が飽和状態にあるという）は実際には行政通達を隠蔽するものにすぎなかった。<sup>17</sup>

当時セネガルではフランス当局によって共産主義勢力に対する強い警戒が示されており、RDAはその活動を大幅に制限されていたといえる。共産主義研究会もたとえ拠点がセネガル内にあった場合でも「活発に活動していたのはセネガル外のメンバー<sup>18</sup>」であり、そのことで研究会はセネガル人の間では「よそものの活動<sup>19</sup>」というイメージすら抱かれるようになっていた。

こうしてセネガルはバマコ会議を欠席して以降、脱植民地化の過程においても独自の道を歩むこととなる。その背後にこの植民地と強い結びつきを築こうとするフランスの影響が大きく反映されていることは既に指摘したとおりだが、限定的にこのような特別措置がとられた結果、その限定的な枠組み、すなわちセネガルという単位がセネガル人の間に定着していったことにも注意が必要であろう。このため、セネガルが模索する独自の道は外部との競争にさらされていくのである。とりわけRDAの党首であったコート・ディ・ヴォワールのフェリックス・ウフェ

＝ボワニは「反セネガルの」として、しばしば対立項を形成していた<sup>20</sup>。

一方セネガルでは、サンゴールが1948年にSFIOを離党し、独自の政党セネガル民主ブロック（BDS）を創設、フランス国会でも海外領土出身の議員たちに呼びかけ、RDAからもSFIOからも自立した「海外独立派」（IOM）を結成する。依然としてフランスが帝国主義的支配力を示し続けるなかで、同じ枠組みのなかから少しずつ、枠組みを変革する独自の動きが兆しはじめたのだった。

この間大国の間では冷戦下の覇権競争が続いており、植民地で台頭しつつある新たな勢力を自国の陣営へ取り込もうと、資金援助をはじめとするさまざまな働きかけが画策されていた。1945年パリで大会を開催した世界労働組合連盟（FSM）や国際自由労働組合総連盟（CISL）がアフリカにおける労働組合運動をフランス帝国の動きのなかに収斂させようとする一方で、アメリカもまたその影響力を高めようと、これらの運動間の対立を煽るなど、競争はイデオロギー以上に権力そのものを目的として展開していたといえる<sup>21</sup>。1957年ガーナの独立に際して当時アメリカの副大統領であったニクソンが行ったアフリカ訪問は「アフリカの労働組合を服従させ、併合し、利用しようというアメリカの帝国主義的態度」を明白に反映しているとして、その報告書の抜粋がアフリカ独立党（PAI）の機関誌に掲載されている。

時間の許す限り、私は訪問先の労働組合の代表者たちと会合を持つことにしていた。歓迎すべきことに、アフリカの国々、とりわけガーナ、モロッコ、チュニジアにおいて、自由労働組合は大幅に進展しているようであった。これらの国々の労働者代表は共産主義労働組合に対抗して民主主義労働組合を結成し、共産主義がその特権分野に根付いてしまわないようにすることの重要性を理解したのだ。（中略）アフリカ大陸の労働組合の発展を注意深く監視し、わが国の外交官や領事たちがこれらの国の労働者の代表と個人的な関係を築くよう促すことがアメリカ政府にとっては決定的に重要である。また、アメリカの労働組合がアフリカの自由労働組合と密接な関係を保ち、両者が知恵と経験を共有できるようにすることも重要に思われる。<sup>22</sup>

この報告を受けてアメリカ国務省にはアフリカ局が組織され<sup>23</sup>、アフリカ担当の人員、投資額ともに増加の一途をたどることになる。また、「アメリカ滞在の機会や奨学金を提供するといっ

たかたちでアフリカの労働組合へ巨額の援助」がアメリカの労働組合からなされていたこともわかっている<sup>24</sup>。このようなアメリカの動きをフランスは強く警戒しており、アフリカにおける両国の関係は決して良好なものではなかった。フランス側がアメリカ人を人種差別者として喧伝しているという在ダカール・アメリカ領事館の報告も残されている<sup>25</sup>。

同じ「陣営」にある米仏のこうした対立を考慮にいれると、戦後フランスにおける反共主義は冷戦のイデオロギーよりも、帝国主義の文脈上に位置づけられるものといえる。フランス当局が諜報機関を通して行った多数の調査が、フランスの帝国主義的関心の強さを反映している。主に調査の対象となったのは共産主義とイスラームであるが、この性質のまったく異なる2つの動きは、帝国内の分離的ナショナリズムを刺激するとして共にフランス帝国の二大脅威とされていたのである。海外領土省には多数の情報が寄せられ、また諜報機関 SDECE は独自の調査結果を直接大統領府の内務部に報告していた。すなわちそれは植民地の安定に関わる内政の問題として扱われていたのであり、脅威はその思想的内容ではなく、ナショナリズム運動との結びつきという観点によってのみ定義されていたのだ。ここでも「アフリカ」は自立的思想を持った主体的アクターとしてではなく、帝国内でコントロールされるべき対象として捉えられていたといえよう。実際 SDECE の初期の報告書には、サハラ以南のアフリカにおける共産主義が信条を持たないものとして例えば次のように描かれている。

事実、それは主にナショナリストあるいは人種差別的な感情の生成に徹しており、白人勢力の排除をもっぱらの目的としているのである。<sup>26</sup>

植民地支配に対する抵抗を、反白人感情を煽る攪乱分子と捉える当局の見解の背後には、フランスの支配が人種を超えて普遍的な秩序をもたらしようという歪んだ使命感に裏打ちされた帝国意識が見え隠れしている。さらに報告書は以下のように続く。

イギリス当局が原理主義運動をもっぱら共産主義の産物とするのもあながち間違いではないのだ。(中略)とはいえ、これらの運動の「リーダー」たちのうち、最も現実的な者たちは堂々とアメリカにも支援を要求している。しかもこの支援競争にロシアが加われば、陣営内の調整が必要ないだけに、一番過激な運動を支援するであろうと予想され、危機は



いっそう重大である。イギリスは従来の方針に則って原則的に「自治政府」を容認することでこの流れに抵抗しようとしている。この政策がアフリカの隣国に深刻な影響を及ぼさないか、今後の展開を注視する必要がある。<sup>27</sup>

信条を持たないとされるこれらの運動が帝国の内外から利用され、「反フランス」感情の生成、自治や独立の推進など帝国解体へと向かう方向性と結びつくことが懸念されていたのであり、問題は常にフランス帝国の覇権の維持であった。抵抗運動のなかに一貫した信条を認めることは、フランスの普遍主義の絶対性を問いに付すことであり、どうしても避けなくてはならなかったのだ。こうして冷戦状況もフランスにとっては帝国政治の一環として解釈され、反共主義も覇権競争も帝国主義の源泉として吸収されていくのである。

さらにここで注目すべきなのは、米仏における「アフリカ」の定義のずれである。アメリカのニクソンが「アフリカの国々」として「ガーナ、モロッコ、チュニジア」を並列しているのに対し、フランスのSDECEの報告書は「サハラ以南のアフリカ（ブラック・アフリカ）」に限定されており、マグレブやレバント諸国と区別している。「ガーナ、モロッコ、チュニジア」はニクソンが「アフリカ訪問」を行った時点での数少ない独立国であるから、そこに自由と民主主義の発展を見出すアメリカ側の意図は明らかであろう。一方フランスは、「アフリカ」で展開されている動きが「アメリカに支援を要求」することにも批判的態度を示しており、共産主義と名づけられた警戒の対象は、民族自決を志向するナショナリズムであることが指摘できる。もうひとつの脅威とされたイスラームについても同様の分析が可能であり、「ブラック・アフリカ」のイスラームが中東やマグレブで展開されている「原理主義運動」と結びつくことを警戒したフランスは前者の「アフリカ性」を強調することで後者との区別を図ろうとするのである。こうして「アフリカ」の動きは帝国主義的観点から定義され続けていたといえよう。

## 2. アフリカの戦後

一方、戦後のさまざまな争点を帝国政治に収斂させ、帝国システムを保とうとするフランスに対し、植民地の側では、状況を自らの立場から解釈しようという動きがあった。冷戦の緊張の高まりと新たな帝国主義の影を前にこれらの国は「アフリカ」の存在を表明すべく非同盟主義を主張するのである。それは「アフリカ」の「独立的」立場を表明し、新たな世界観を提示

することによって問題を帝国の枠組みから解放しようという試みであった。

帝国支配は地政学的問題にとどまらず、思想の領域にまで及んでおり、脱植民地化はこの権威を覆すような発想を必要としていた。支配の対象でありながら、解放の主体となりうる「アフリカ」概念はまさにこの転換を可能にする鍵であったといえよう。時代状況に大きく依存したこの概念を捉えなおし、新たな意味を付与していこうとする動きが発展していくのである。それはこの表象そのものを帝国の枠組みから解放しようという試みでもあった。

## 2.1. 「独立的」立場の表明

戦後、新しい秩序が模索されるなかで、それまで「対象」としてその扱いを議論されてきた人びとが、主体的に自らの立場を定義する余地がうまれていった。こうして1950年代に脱植民地化に向けた具体的な運動が組織されていくのである。残存する帝国主義に抗して、主体的なアクターとしての立場を表明するため被植民者たちは、帝国権力から距離を取り彼らをシステム内に巻き込もうとする求心的な流れから逃れる必要があった。

1948年にサンゴールがSFIOを離党し、独自の政治運動を率いていくのもこうした動きのひとつであった。一方、同時期にフランス共産党はフランスの与党連合から除外され、設立当初、共産党の傘下にあったことで激しい弾圧を受けていたRDAも1950年にはその庇護を離れ、独立した政党となる<sup>28</sup>。労働組合においても1955年には労働総同盟（CGT）がアフリカ労働者総同盟（CGTA）になるなど自立化が進行していった。

もともと、労働組合の自立化自体も覇権争いを免れてはいない。アフリカ自由労働組合総連盟「労働の力」（CASL-FO）やアフリカ・信者労働者総連合（CATC）といった労働組合の集合組織の自立化や創設は、労働組合の国際組織が運動の影響力をアフリカに広めようとする流れの延長にすぎないのだ<sup>29</sup>。しかしこうした動きのなかに「アフリカ」的運動、すなわち他の流れとは一線を画した「アフリカ」独自の運動の萌芽を見出すこともできよう。やがてこの動きは「アフリカ外の労働組合組織とは提携を結ばず<sup>30</sup>」「国際労働組合組織にも一切加盟しない<sup>31</sup>」方針を定めたブラック・アフリカ労働者総同盟（UGTAN）の創設へとつながるのである。経済開発の担い手として植民地システムの中心的なアクターであった労働者たちは、同時にシステム変革の最前線にあり、フランスの帝国意識のみによって支えられた支配体制の影響を受けながらも、こうした労働運動は帝国の変遷に大きく関わっていった。運動内で頻繁に使用される

ようになる「アフリカ」の語も、こうして脱植民地化を担う闘争的標語としての意味を帯びていくのだ。

こうした意味論的变化は戦後の新しい秩序の構成を支えていくのである。1947年にいち早く帝国支配からの独立を獲得したインドが、他のアジア諸国と共同で開催した1955年のバンドン会議は、これらの動きのなかで大きな転換点を築くこととなった。参加国の大半はアジアの国々であったが、会議の反響が会場にいたアフリカ諸国の人びとにも及んだことはいうまでもない。とりわけフランス植民地では、帝国内で2つの戦争が行われており、脱植民地化の機運が高まりつつあった。1954年ディエン・ビエン・フーでのフランス軍の敗退で転機を迎えるインドシナ戦争と、続いて勃発するアルジェリア戦争である。

バンドン会議で採択された平和10原則と非同盟主義の動機となった戦争の脅威は、フランス植民地においてはいっそう重大であった。帝国内の戦争に被植民者が再び動員されることも抗議の一因となっていた。脱植民地化運動の担い手のひとつであった在仏ブラック・アフリカ学生連盟（FEANF）は機関誌『ブラック・アフリカ学生』に『セネガル狙撃兵問題に関するアフリカ学生の見解』と題した動議を掲載している。

われわれは戦争の終結とアルジェリア・レジスタンスの代表者との交渉の開始を望むとともに、アルジェリアにおける「セネガル狙撃兵」と称される部隊の使用に対し強く抗議する。「分断統治」という方針に則ったこの憎むべき手段はありとあらゆる観点から糾弾されてしかるべきである。<sup>32</sup>

植民地兵の戦争動員は、フランス国民議会における最初の黒人議員となったセネガル人ブレーズ・ディアニュがフランス市民権と引き換えに強化した過去がある。すなわち戦争参加も帝国の同化政策の一環とされていたのだ。こうした経緯を踏まえると、「アフリカ学生の見解」はその立場に関して大きな転換を見せているといえよう。

「狙撃兵」が卑劣な仲介者として植民地内の弾圧行為に参加させられることほど、われわれ民族の名誉が傷つけられることはない。<sup>33</sup>

「アフリカ」独自の動きが芽生えはじめた時期にあって、抗議運動はもっぱら思想的な側面からなされていることに注目する必要がある。フランスの「仲介者」となることを嫌う姿勢は、本国勢力から距離を置こうとするものといえる。動議はまた、次のように続いている。

アフリカの代表と称する者が、植民地の人びとを永遠に隷属させようと策略している人びとの発想に基づいた施策に手を貸している事態は憂うべきである。<sup>34</sup>

ここで糾弾されているのはフランス政府に懐柔され、アルジェリアへの派兵を決定したギ・モレ政権に組閣されていたウフェ＝ボワニのことであるが、フランスとの連携を重視したその政治姿勢に対しては、運動のなかで多く批判がよせられていった。

このように、戦後、大国の覇権争いが激化し新しい秩序が大国の大義を通して規定されようとするなかで、バンドン会議が表明した原則は、「第三世界」の立場を主張するこれらの人びとが状況を主体的に捉え、脱植民地化へと向かうために不可欠であった。アメリカはこの動きが「アフリカ」を西欧世界から引き離すことを懸念し、この会議の「アジア・アフリカ」という呼称を危険視していたのに対し、主催者の側は、この動きがまさに「第三世界」全体に広がりを見せるようアジア・アフリカの連携を強調した。非同盟をひとつの立場とすることは、「アフリカ」が新しい秩序に主体的に参加することを意味していたのである。

## 2.2. 対外関係の再定義

この非同盟主義はやがて、「アフリカ」の脱植民地化の動きの中核に据えられ独自の発展を遂げることとなる。「アフリカ」は絶対的他人の表象として形成されてきたが、非同盟主義的立場の表明、すなわち帝国主義的外部勢力から距離を取ることは、かつてこうして外部から付与された他人性を自ら利用し、内在化していく行為として捉えることができる。すなわち、ヨーロッパ的自己と表裏をなす他人として帝国内に組み込まれるのではなく、帝国システムを逸脱したところに自立的に存在する他人になろうとするのである。

こうした観点から、「アフリカの存在」を意味する「プレザンス・アフリケーヌ」グループによる出版活動はまさに「アフリカ」という存在の新しい表象を発信しようというものであった。1947年に発刊された雑誌『プレザンス・アフリケーヌ』の創刊号にセネガル人編集長アリウー

ヌ・ディオプは「この雑誌は思想的、政治的ないかなるイデオロギーにも属さない<sup>35</sup>」として非同盟主義の原則を明確に打ちだしている。また、同論稿の標題となっている「Niam n'goura」は、「肥えるためではなく、生きるために食べよ」というトゥクルール民族の格言に由来するが、この引用は、拡張をやめない帝国主義に抗して、「存在」するための糧を提供することが出版活動の目的だったことを表わしている。

ディオプ自身がオブザーバーとして参加していたバンドン会議に着想を得て、プレザンス・アフリケーヌは翌1956年、世界中の黒人ディアスポラの作家、芸術家に呼びかけて「文化版バンドン会議」を企画する。帝国の首都パリで開催されることとなる第1回黒人作家芸術家会議である。「アフリカの存在」という立場表明を通して西欧と一定の距離をとろうとするグループの方針はこの会議にも反映されていた。ハイチ詩人のプライス＝マルスは開会式で次のように述べている。

われわれは皆ほとんどが消えることのない独自性によって区別されている—聖書によれば長い間—何千年もの間—太陽にさらされていたために濃くなった肌の色である。この特異性を理由に17世紀のおぞましい重商主義がわれわれの祖先を何百万人も大西洋を越えて隷属させたのだ。ところがこの世界のすばらしいめぐり合わせによって、そして崇高な精神的巻き返しによって、われわれは20世紀にこの特別な印を通して、黒人文化を表明し、高め、賛美するのである。<sup>36</sup>

黒人文化を定義することからはじまった第1回会議では、「アフリカ」概念の引用と「西欧」(occident)あるいは「ヨーロッパ」との対比、ならびに被植民者同士の連帯の提起が参加者の共通了解となっていた。ディオプ自身、開会の辞で頻繁に「西欧」に言及しており、会議全体が「西欧」へ向けられているように見受けられる<sup>37</sup>。会議は続いてマダガスカル詩人、ジャック・ラベマナンザラの『ヨーロッパとわれわれ』と題された講演で幕を開け、『アフリカとヨーロッパの対話』というテーマでの最終ディスカッションで締めくくられる<sup>38</sup>。ディスカッションでエメ・セゼールは以下のような発言をしている。

われわれの連帯は決してみなさんが思っているような生物学的なものではありません。ま

まったく違います。人種主義ではありません。われわれの間に連帯感が生じていると言いました。外から生じた連帯感、「他者」によって、とりわけヨーロッパによって生じた連帯感なのです。<sup>39</sup>

こうして「西欧」「ヨーロッパ」との距離は主体的に測りなおされ、他者としての「アフリカ」がアイデンティティと化していくのである。この動きは支配関係そのものを脱構築している点で、帝国の枠組みのなかに収斂していったかつての運動よりも大きく脱植民地化に近づくものであったといえよう。

ここで非同盟主義が生まれた冷戦という文脈に再び立ち戻ってみると、セネガル独立の中心となった2人の政治家マモドゥ・ディアとレオポルド・セダール・サンゴールの政治思想の中心に据えられている「アフリカ社会主義」が、「アフリカ」というラベルのもとに状況を解釈しなおそうとする動きをよく表わしていることに気づく。両者はマルクス主義あるいはその遺産に言及しながらも、はっきりと袂を分かち「アフリカ・ネーション」独自の展開、すなわち「社会主義のアフリカの進路」を模索するのである。それは冷戦の二項対立を超えて「アフリカ」として十全な立場を築こうという試みであった。

ディアは著書『アフリカ・ネーションと世界的連帯<sup>40</sup>』のなかで「アフリカ・ネーション」の新しい定義を提示して次のように記している。

バンドン会議以降公式に第三世界を構成しているネーションのプロレタリアートにとって最も固い基盤はマルクス・レーニン主義よりも連帯意識にある。<sup>41</sup>

ディアはここで、外部勢力の影響を免れた「アフリカ」独自の立場をネーションという形を通して表現しようとしているのだ。また、「何よりも重要なのは存在意識、新興意欲、世界的成長に参加し、ネーション間の正義を求める意欲である<sup>42</sup>」として、ネーションの定義のなかで意を表明する行為を強調している。

既存のマルクス主義を採用するのではなく、社会主義を「アフリカの」現実にあてはめ、「アフリカの」進路を描きなおすことが模索されていたのだ。「社会主義のアフリカの進路」(voie africaine du socialisme) というサンゴールの表現をディアは自身の著作のなかで引用しているが、

公文書館に保存されたディアの個人史料のなかには、代わりに「アフリカの生」(vie africaine) という表現が記されたメモや、同書を「アフリカ的生活の実態」(the facts of African life) の記録と説明した書評記事などが残されている<sup>43</sup>。それは、社会主義が「アフリカ」において新たな「生」をおくること、すなわち新たに「存在」し「新興」していく方向性を提示していたといえよう。

一方サンゴールはマルクス、エンゲルスの文章を直接扱い、『マルクスとエンゲルスのアフリカの再読<sup>44</sup>』を執筆している。同書によると、

マルクスの思想は 19 世紀ヨーロッパのものであり、そのすべてを受容するわけにはいかない。われわれは 20 世紀のアフリカという、自身の置かれた状況にしたがってこの思想を補完しなくてはならない。<sup>45</sup>

サンゴールはまた、次のようにも記している。

ヨーロッパのプロレタリアートと被植民者との連帯といわれるものは、ヨーロッパが吹聴した夢想的な題材であり、根拠のうすいものである。<sup>46</sup>

これに対して、サンゴールらが主張したアフリカの連帯、とりわけ「ブラック・アフリカ」の歩みに重点を置く考え方は、非人種主義を標榜する共産主義的立場とは対立しかねないが、「自身の置かれた状況」を定義しなおし、独自の方針を辿ろうとしている点で、脱植民地化闘争の中核をなすものであった。

また、支配からの解放が先決の課題となっていた被植民者にとって、冷戦の激化に伴ってソ連が支配力を強化していくさまは、その普遍性神話を崩壊させ、覇権争いの帝国主義的側面をあらわにし、警戒されるようになる。こうしてマルクス主義とは一線を画し、「アフリカ」独自の普遍性を模索すること、ネーションの建設基盤となる共通の価値、すなわち「アフリカ」への帰属を主張する人びとが根をはり、発展の源泉とするような価値を中核にすえて「アフリカの思考と行動を志す」ことが目的とされていくのである。社会主義的発想の根拠を「アフリカ」社会に見出そうとする「アフリカ社会主義」はその一端を担うものとして提起されたといえよ

う。

ブラック・アフリカ人は垂直的および水平的連帯の綿密なネットワークのなかに結びつけられ、また同時に支えられている。これこそ人間は社会によって、また社会においてしか自己実現できない、という、社会主義によって今日評価された真実のもっとも完全な例証である。<sup>47</sup>

ここでサンゴールが文明の構成要素として挙げる「アフリカ」的価値は、かつて西欧文明と対置することで定義されていた諸要素の絶対性を主張し、多元性を確保することで、対立を超克する新たな基準となるものであった。

ヨーロッパの制度を、東側であれ西側であれ、そのまま輸入しても、民族の、そして1人1人の真の独立という目的は達成されない。<sup>48</sup>

冷戦下では諸勢力がそれぞれの方法で勢力圏を拡大しようとしており、その対立構造に取り入れられること自体に抵抗しなくてはならなかったのである。

「アフリカ」の独自性を通して対立を超えたところにサンゴールやディアが模索した関係性とは、2人が大きく影響を受けた哲学者テイヤール・ド・シャルダンの提示した「相補性」(complémentarité)の概念に基づくものであった。両者はともに世界の相互依存性が高まっていることを強く認識しており、外部勢力と一定の距離を保ちながらも、サンゴールのいう「普遍文明」あるいはディアのいう「連帯的文明」を志し、「アフリカ」がひとつの価値基準を構成できるような開かれた世界観が主張されたのだ。

この「相補性」という発想は「アフリカ」概念の脱植民地化を方向付けるものであった。終戦直後まで平等性が重視されたことで、被植民地側のさまざまな要求が総じて帝国内の同化の枠組みへと収斂していったのに対し、他者性を主体的な距離として再定義することで、「アフリカ」は比較不能な位置へと移行し、比較を前提とした平等性の概念は無効化されていった。他者性がアイデンティティに取り入れられたことで、自己の尺度を他者に適用する余地がなくなったのである。他者性の内在化はこうして平等性の神話を崩し、新たに相補性概念が取り入れ



られていった。

ディアはティヤール・ド・シャルダンに言及して「人類は平等性よりも相補性に向かって発展しているように思われる<sup>49</sup>」と記している。ここで平等概念がマルクス主義の中核をなしていたことにも注意が必要であろう。一方サンゴールは、やはり第三世界主義の文脈でバンドン会議の直後に『アフリカとヨーロッパ、2つの相補的世界』と題した以下のような記事を書いている。

ユーロ・アフリカ問題の利点は、2つの大陸が、男女のごとく、対をなしているがゆえに相補的であり、暴力行使も辞さないほど対立的な2つの陣営の間にそれらを超えた文化的、さらには平和的な力を築き上げることができる点にある。<sup>50</sup>

男女というたとえが植民地主義的色彩を免れないことをのぞけば、「アフリカとヨーロッパ」が、互いの否定の上に自己を確立していた対立関係から、互いに依存しあう補完関係へと移行したことは大きな転換であったといえよう。経済学を修めた経歴を持つディアは、1958年の国民投票を受けて、フランス連合に替わって成立する共同体（Communauté）のなかで初めて独立を達成したマリ連邦<sup>51</sup>について以下のような分析をしている。

マリ連邦の経済は世界に開かれたものである。一方の陣営に入るためにかつてからの関係性を否定するようなことがない限り、東側でも西側でもさまざまなネーションとの対話が可能なはずなのだ。ネーション間の関係は二項対立ではなく相互補完、そして同心円的な連帯という新たな方向へと進化すべきであるというのがマリの方針である。東西の二元性は相補性として、世界レベルに拡大された連帯圏に位置づけられ、かつて決定的な対立と捉えられてきたものが合意の可能性を持ち、さらには共存の意義、相互の発展の条件を提供するものとなるのである。<sup>52</sup>

すなわち、「アフリカとヨーロッパ」の間の距離はどちらかの消滅によって解消されるものではなく、混淆のなかに維持されるべきものとされている。「混淆は、一般に考えられているのとは違い、多様な対立項の総和ではなく、動的な共生のなか相補的な徳を集めた<sup>53</sup>」ものなのだ。

というのも「混淆」には能動的な意味が含まれているからである。客体化に抑圧されてきた「アフリカ」にとってこの能動性は決定的な意味をもっていたといえる。サンゴールの言葉を借りれば「同化されるのではなく同化し」(assimiler et ne pas être assimilé) 内在化していくことで混淆がなされていくのだ。ここで重要なのは、「同化不能性」が他者を外部へ排除するのではなく、相互依存を生み出すものとして定義しなおされている点である。こうして多様な価値は平等性を保障する同化競争を免れ、そのままのかたちで補完性によって共存するのである。「相補的な多様性に満ちた、より人間的な世界<sup>54</sup>」が模索され、「アフリカ」はそのなかに位置づけられていったのである。

このように相補性に重心が置かれることによって、普遍性自体の捉え方にも変化が生じてくる。サンゴールは自身の定義する「普遍文明」(Civilisation de l'Universel) を普遍的文明 (Civilisation universelle) と区別し、単線的文明化を推進した帝国主義が志向する普遍性の読み替えを図ったのだ。サンゴールによれば、普遍性は多様性によってしか定義できないのであり、「アフリカ」的価値はその構成要素のひとつであった。ディアもまた、過去のイデオロギーがそろって普遍性を主張していながら、それらがそれぞれの時代特有の普遍性を反映していたことを指摘している<sup>55</sup>。そして新しい世界は既存の固定的な枠組みを超えて開放された「連帯的ネーション」によって構成されるべきであるとしたうえで、多様な要素の集合である「アフリカ」のネーションはまさにそのひとつであると考えていたのである。単一的な普遍性の崩壊は、帝国システムの限界を指摘し、より広範で多様な世界観を提示するものであった。こうして「アフリカ」は、西欧を映し出す鏡として、その姿が不在とされた状態から、独自の価値に基づき、西欧と並んで存在を表明するようになっていったのである。

## 結論

帝国システムのなかで形成されていった「アフリカ」概念は、支配の中核、すなわち西欧との関係性のもとに定義されてきた。一方、帝国支配とは支配対象を「外部」に定め、それを内包しつづけようという相反する欲求のうえに成り立つものであり、「アフリカ」概念は、帝国システムのこうした両義性を反映していた。戦後、帝国システムはまさにこの両義性ゆえにほころびを見せはじめ、システムと共にこの関係性が問いに付されていくのである。この転換期といえる状況において「アフリカ」概念が各アクターによって異なる文脈に位置づけられるよう

になると、それは新たな表象を帯びていく。この変容はすなわち、西欧との関係性そのものにも変更を迫るものであり、その意味でこの動きを脱植民地化と捉えることができよう。

一方、脱植民地化の歴史は帝国終焉の歴史でもある。帝国の体制がフランス連合、共同体と変遷し、領土の区分が強化されるのに従って、「アフリカ」は複数の位相を反映した帝國的表象から、「アフリカ・ネーション」、国民国家の象徴へと変化し、独立国家の誕生をもって帝国は崩壊にいたるのである。脱植民地化と並行して進行していったこの表象の国有化の動きは、本稿で扱った戦後状況の解釈を補完するものとして別途分析する必要があるといえよう。「フランス」「アフリカ」両者の解釈は、新生ネーションの形成をめぐる新しい「状況」へと収斂していくのである。

---

<sup>1</sup> Georges BALANDIER, *Sociologie actuelle de l'Afrique noire*, Paris, PUF, 1955.

<sup>2</sup> François-Xavier FAUVELLE-AYMAR, Jean-Pierre CHRETIEN et Claude-Hélène PERROT (éds.), *Afrocentrismes: L'histoire des Africains entre Egypte et Amérique*, Paris, Karthala, 2010.

<sup>3</sup> Bogumil JEWSIEWICKI and David NEWBURY (ed.), *African Historiographies. What history for which Africa?*, London, Sage, 1986.

<sup>4</sup> Philip D. CURTIN, *The Image of Africa*, London, Macmillan, 1965; V.Y. MUDIMBE, *The Invention of Africa*, Bloomington, Indiana University Press, 1988; *The Idea of Africa*, London, James Currey, 1994.

<sup>5</sup> Eric J. HOBBSBAWM, *The age of Empire 1875-1914*, London, Weidenfeld and Nicolson, 1987.

<sup>6</sup> Pascal BLANCHARD et Sandrine LEMAIRE (éds.), *Culture impériale 1931-1961*, Paris, Autrement, 2004.

<sup>7</sup> *La Conférence africaine française. Brazzaville. 30 janvier-8 février 1944*, Paris, Ministère des colonies, 1945, p. 45.

<sup>8</sup> *La Conférence africaine française, op. cit.*

<sup>9</sup> *Ibid.*, pp. 26-30, 32-34, et 37-41.

<sup>10</sup> Archives Nationales du Sénégal (ANS)/18G/261.

<sup>11</sup> Catherine COQUERY-VIDROVITCH, *Afrique noire. Permanences et ruptures*, Paris, L'Harmattan, 1992, p. 346; Jean SURET-CANALE (éd.), *Les Groupes d'études communistes, GEC en Afrique noire*, Paris, L'Harmattan, 1994, p. 5.

<sup>12</sup> Christian ROCHE, *Le Sénégal à la conquête de son indépendance 1939-1960*, Paris, Karthala, 2001, p. 74.

<sup>13</sup> Ruth Schachter MORGENTHAU, *Political parties in French-speaking West Africa*, Oxford, Clarendon Press, 1964, p. 132.

<sup>14</sup> Manuela SEMIDEI, « Les socialistes français et le problème colonial entre les deux guerres (1919-1939) », *Revue française de science politique*, n° 6, 1968, pp. 1115-1154.

<sup>15</sup> Bakary TRAORE, « La participation de l'Union démocratique sénégalaise au combat du R.D.A. », *Actes du colloque international sur l'histoire du R.D.A., 18-25 octobre 1986*, t. I, Abidjan, CEDA-Hatier, 1987, p. 157.

<sup>16</sup> J. SURET-CANALE (éd.), *op. cit.*, p. 43. レイモン・バルベはフランス連合議会の共産党グループ書記長であり、植民地問題の責任者であった。

- <sup>17</sup> *Ibid.*, p. 47.
- <sup>18</sup> *Ibid.*, p. 43.
- <sup>19</sup> *Ibid.*, p. 54.
- <sup>20</sup> C. COQUERY-VIDROVITCH, *op. cit.*, p. 347.
- <sup>21</sup> Gérard FONTENEAU, *Histoire du syndicalisme en Afrique*, Paris, Karthala, 2004.
- <sup>22</sup> « L'impérialisme contre le syndicalisme », *La Lutte*, n° 17, janvier 1959, p. 3.
- <sup>23</sup> Foreign Relations of the United States, 1958-1960, vol. XIV, doc. 7, p. 23.
- <sup>24</sup> G. FONTENEAU, *op. cit.*, p. 30.
- <sup>25</sup> Charles-Robert AGERON et Marc MICHEL (dir.), *L'Afrique noire française : l'heure des Indépendances, Actes du colloque « La France et les indépendances des pays d'Afrique noire et de Madagascar » organisé par l'Institut d'histoire du temps présent. Aix-en-Provence : 26-29 avril 1990*, Paris, CNRS, 1992, p. 545.
- <sup>26</sup> Archives Nationales d'Outre-Mer (ANOM)/1affpol/2246/B1 : SDECE, « Le communisme en Afrique noire », p. 5.
- <sup>27</sup> *Ibid.*
- <sup>28</sup> RDA に関する情報は『共産主義プロパガンダ』との関連で収集されており、その活動や政治思想より他の勢力との関係性が警戒の対象であった。党首ウフエーボワニのギ・モレ政権（1956-1957）への参画は、フランス当局が弾圧を続けながらも、同勢力を取り込み、支配体制を強化しようとしていたことを示している。なお後に触れるアルジェリアへの派兵のほか、海外領土のその後の政治制度に大きく影響を及ぼし、とりわけ旧植民地の極小国家化を促進したとされる基本法（loi n° 56-619 du 23 juin 1956）が制定されたのも SFIO が中心となった同政権下である。（ANOM/1affpol/2246; ANS/17G/596）
- <sup>29</sup> Babacar FALL, « Le mouvement syndical en Afrique occidentale francophone. De la tutelle des centrales métropolitaines à celle des partis nationaux uniques, ou la difficile quête d'une personnalité (1900-1968) », *Matériaux pour l'histoire de notre temps*, n° 84, 1<sup>er</sup> octobre 2006, p. 29.
- <sup>30</sup> G. FONTENEAU, *op. cit.*, p. 59.
- <sup>31</sup> B. FALL, *op. cit.*, p. 29.
- <sup>32</sup> Amady Aly DIENG, *Les Grands combats de la FEANF*, Paris, L'Harmattan, 2009, p. 198 に掲載。
- <sup>33</sup> *Ibid.*
- <sup>34</sup> *Ibid.*
- <sup>35</sup> Alioune DIOP, « Niam n'goura ou les raisons d'être de *Présence Africaine* », *Présence Africaine*, n° 1, nov.-déc. 1947, p. 7.
- <sup>36</sup> *Présence Africaine* : « 1<sup>er</sup> Congrès international des écrivains et artistes noirs », n° 8-10, 1956, pp. 7 et 8.
- <sup>37</sup> *Ibid.*, pp. 9-18.
- <sup>38</sup> *Présence Africaine*, n° 8-10, *op. cit.*
- <sup>39</sup> *Ibid.*, p. 374.
- <sup>40</sup> Mamadou DIA, *Nations africaines et la solidarité mondiale*, Paris, PUF, 1960.
- <sup>41</sup> *Ibid.*, pp. 17 et 18.
- <sup>42</sup> *Ibid.*, p. 10.
- <sup>43</sup> ANS/VP097.
- <sup>44</sup> Léopold Sédar SENGHOR, *Pour une relecture africaine de Marx et d'Engels*, Dakar, NEA, 1976.
- <sup>45</sup> *Ibid.*, p. 47.
- <sup>46</sup> L. S. SENGHOR, *Liberté 2: Nation et Voie africaine du socialisme*, Paris, Seuil, 1971, p. 284.
- <sup>47</sup> L. S. SENGHOR, « Eléments constructifs d'une civilisation d'inspiration négro-africaine », *Présence Africaine* : « Deuxième Congrès des écrivains et artistes noirs », n° 24-25, 1959, p. 263.
- <sup>48</sup> *Ibid.*, p. 276.
- <sup>49</sup> M. DIA, *op. cit.*, pp. 15 et 16.
- <sup>50</sup> L. S. SENGHOR, *Liberté 2, op. cit.*, p. 148.

<sup>51</sup> 旧仏領西アフリカ連邦内の連帯を目的として構想された連邦であったが、1959年1月に起草された憲法を批准したのはセネガル、仏領スーダン2つの領土議会にとどまった。当初は懐疑的であったフランスも1960年に連邦側と交渉を開始、同6月にマリ連邦は共同体の一員としての立場を維持したまま、初めてフランスからの独立を達成した。

<sup>52</sup> M. DIA, *op. cit.*, p. 128. しかしこの開放性は脆弱性につながるものでもあり、連邦は結成後わずか1年半ほどでセネガル、マリ2つの独立共和国に分裂、崩壊にいたった。

<sup>53</sup> L. S. SENHOR, *Liberté 2, op. cit.*, p. 157.

<sup>54</sup> *Ibid.*, p. 123.

<sup>55</sup> M. DIA, *op. cit.*, p. 11.

# La réinterprétation de « l’Afrique » en Afrique Occidentale Française

Sakiko NAKAO

Si la « situation coloniale » décrite par Georges Balandier encadrait la dynamique de la société coloniale, la décolonisation créa une nouvelle dynamique qui dépassa ce cadre. Ce passage d’un système à un autre formait alors lui-même une « situation » de laquelle dépendaient les différents acteurs qui essayèrent chacun de l’interpréter. Le présent article propose d’analyser comment ces acteurs ont vécu cette nouvelle situation où s’est installée par la suite, la dynamique de la décolonisation.

Les descriptions de cette nouvelle situation reflètent la mutation des représentations qui y sont employées, celles de l’Afrique en particulier. Car, comme l’a montré V. Y. Mudimbe, l’Afrique s’avère être une image construite, reçue et transformée pour accompagner les différentes étapes de la colonisation à la décolonisation. Ainsi, nous nous sommes intéressée à l’évolution de la place qu’occupe cette Afrique imagée à la fois chez les colonisateurs et les colonisés. Alors qu’elle fut initialement conçue en tant qu’objet à conquérir puis à intégrer au sein du système impérial, elle devint le moteur des mouvements décolonisateurs et sortit de la situation coloniale.

Après les deux guerres mondiales, le système impérial fut remis en cause et les mouvements décolonisateurs prirent forme dans les années 1950. Chaque acteur essaya de saisir la situation dominée alors par le contexte de la guerre froide : d’une part, la France impériale voulut encadrer les enjeux en tant que question intra-impériale pour redevenir une puissance, son Empire à l’appui, tandis que d’autre part, l’Afrique réaffirma son existence extra-impériale à l’aide du principe de non-alignement.

L’altérité qui jetait l’Afrique en dehors du cercle de ladite civilisation pour ensuite l’assimiler et l’insérer au sein de l’Empire, fut finalement incarnée par l’Afrique même qui se construisit une identité distincte du système impérial. C’est cette réinterprétation de « l’Afrique » qui modifia et diversifia la vision du monde et amena vers un autre cadre des représentations désormais associé à une situation décolonisée.